

魚妖

岡本綺堂

青空文庫

むかしから鰻うなぎの怪を説いたものは多い。これはかの曲亭馬琴の筆記に拠ったもので、その話をして聴かせた人は決して嘘をつくような人物でないと、馬琴は保証している。

その話はこうである。

上野の輪王寺宮に仕えている儒者に、鈴木一郎という人があった。名乗は秀実、雅号は有年といつて、文学の素養もふかく、馬琴とも親しく交際していた。

天保三、みずのえたつ壬辰年の十一月十三日の夜である。馬琴は知人の関横南の家にまねかれて晚餐の馳走になった。有名な気むずかしい性質から、馬琴には友人というものが極めてくない。ことに平生から出不精を以つて知られている彼が十一月——この年は閏年であつた——の寒い夜に湯島台までわざわざ出かけて行つたくらいであるから、横南とはよほど親密にしていたものと察せられる。酒を飲まない馬琴はすぐに飯の馳走あかりになった。燈火の下で主人と話していると、外では風の音が寒そうにきこえた。ふたりのあいだには、ことしの八月に仕置になつた鼠小僧の噂などが出た。

そこへあたかも来あわせたのは、かの鈴木有年であつた。有年は実父の喪中であつたが、馬琴が今夜ここへ招かれて来るということを知つていて、食事の済んだ頃を見はからつて、

わざと後れて顔を出したのであった。彼の父は伊勢の亀山藩の家臣で下谷したやの屋敷内に住んでいたが、先月の廿二日に七十二歳の長寿で死んだ。彼はその次男で、遠い以前から鈴木家の養子となつていたのであるが、ともかくもその実父が死んだのであるから、彼は喪中として墓参以外の外出は見あわせなければならなかった。しかしこの潢南の家は彼の親戚に当つているのと、今夜は馬琴が来るというのとで、有年も遠慮なしにたずねて来て、その団欒にはいったのである。

馬琴は元来無口という人ではない。自分の嫌いな人物に対して頗る無愛想であるが、ころを許した友に対しては話はなかなか跳はすむ方であるから、三人は火鉢を前にして、冬の夜の寒さを忘れるまでに語りつづけた。そのうちに何かの話から主人の潢南はこんなことを言い出した。

「御承知か知らぬが、先頃ある人からこんなことを聴きました。日本橋の茅場町に錦とかいう鰻屋があるそうで、その家では鰻や泥どじょう鱒すっぽんのほかに泥すっぽん鰻すっぽんの料理も食わせるので、なかなか繁昌するということです。その店は入口が帳場になっていて、そこを通りぬけると中庭がある。その中庭を廊下づたいに奥座敷へ通ることになっているのですが、ここに不思議な話というのは、その中庭には大きい池があつて、そこにたくさんのすっぽんが放

してある。天氣のいい日には、そのすつぽんが岸へあがつたり、池のなかの石に登つたりして遊んでいる。ところで、客がその奥座敷へ通つて、うなぎの蒲焼や泥鰌鍋をあつらえた時には、かのすつぽん共は平気で遊んでいるが、もし泥鰌をあつらえると、かれらは忽ちに水のなかへ飛び込んでしまう。それはまったく不思議で、すつぽんという声がきこえると、たくさんのすつぽんがあわてて一度に姿をかくしてしまふそうです。かれらに耳があるのか、すつぽんと聞けばわが身の大事と覚るのか、なにしろ不思議なことで、それがかんがえると、泥鰌を食うのも何だか忌いやになりますね。」

有年はだまつて聴いていた。馬琴はずかになら答えた。

「それは初耳ですが、そんなことが無いとも言えません。これはわたしの友達の小沢蘆庵おざわろあんから聴いた話ですが、蘆庵の友達に伴蒿蹊ばんこうけいというのがあります。ご存じかも知れないが、蘆庵、蒿蹊、澄月、慈延といえは平安の四天王と呼ばれる和歌や国学の大家ですが、その蒿蹊がこういう話をしたそうです。家の名は忘れましたが、京に名高いすつぽん屋があつて、そこへ或る人が三人づれで料理を食いに行くと、その門かどぐち口にはいったかと思うと、ひとりの男が急に立ちどまつて、おれは食うのを止そうという。ほかの二人もたちまち同意して引つ返してしまつた。見ると、おたがいに顔の色が變つてゐる。まず一、二町のあ

い達は黙つて歩いていたが、やがてそのひとりが最初帰ろうと言い出した男にむかつて、折角ここまで足を運びながらなぜ俄に止めると言い出したのかと訊くと、その男は身をふるわせて、いや、実に怖ろしいことであつた。あの家の店へはいると、帳場のわきに大きなすっぽんが炬燵こたつに倚りよかかつていたので、これは不思議だと思つてよく見ると、すっぽんでなくて亭主であつた。おれは俄にぞつとして、もうすっぽんを食う気にはなれないので、早々に引つ返して来たのだという。それを聞くと、ほかの二人は溜息をついて、実はおれ達もおなじものを見たので、お前が止そうと言つたのを幸いに、すぐに一緒に出て来たのだという。その以来、この三人は決してすっぽんを食わなかつたということです。それは作り話でなく、蒿蹊がまさしくその中のひとりの男から聴いたのだと言います。」

有年はやはり黙つて聴いていた。横南は聴いてしまつて溜息をついた。

「なるほど、そういう不思議が無いとはいへませんね。おい、一郎。おまえの叔父さんのようなこともあるからね。お前、あの話を曲亭先生のお耳に入れたことがあるか。」

「いいえ、まだ……。」と、有年は少し渋りながら答えた。

「こんな話の出たついでだ。おまえも叔父さんの話をしろよ。」と、横南はうながした。

「はあ。」

有年はまだ渋っているらしかった。有年の叔父という人は若いときから放蕩者で、屋敷を飛び出して何かの職人になつていたりとかいう噂を馬琴もたびたび聞いているので、その叔父について何か語るのを甥の有年もさすがに恥じているのであろうかと思いやると、馬琴もすこし気の毒になつた。上野の五つ（午後八時）の鐘がきこえた。

「おお、もう五つになりました。」と、馬琴は帰り支度にかかろうとした。

「いや、まだお早うございます。」と、有年は押し止めた。「今もこの主人に言われたのですが、実はわたくしの叔父について一つの不思議な話があるのを、今から五年ほど前に初めて聴きました。まことにお恥かしい次第ですが、わたくしの叔父というのは箸にも棒にもかからない放蕩者で、若いときから町屋まちやの住居をして、それからそれへと流れ渡つて、とうとう左官屋になつてしまいました。それでもだんだんに年を取るにつれて、職もおぼえ、人間も固まつて、今日こんにちではまず三、四人の職人を使い廻してゆく親方株になりましたので、ここの家へもわたくしの家へも出入りをするようになりました。そういう縁がありますので、わたくし共の家で壁をぬり換える時に、叔父にその仕事をたのみますと、叔父は職人を毎日よこしてくれまして、自分もときどきに見廻りに来まして。そこで、ある日の午飯にうなぎの蒲焼を取寄せて出しますと、叔父は俄に顔の色を変えて、いや、鰻

は真つぴらだ。早くあつちへ持つて行つてくれというのです。これが普通の職人ならば、うなぎの蒲焼などを食わせる訳もないのですが、職人といつても叔父のことですから、わたくし夫婦も気をつけてわざわざ取寄せて出したのに、見るのも忌だと言われると、こつちもなんだか詰まらないような気にもなります。殊に家内は女のことですから、すこしく顔の色を悪くしたので、叔父も気の毒になつたらしく、これには訳のあることだから堪忍してくれ。ともかくも江戸の職人をしていて、鰻が嫌いだなどというのはおかしいようだが、おれは鰻を見ただけでも忌な心持になる。と言つたばかりでは判るまい。まあこういうわけだと、叔父が自分のわかい時の昔話をはじめたのです。」

有年の叔父は吉助というのであるが、屋敷を飛び出してから吉次郎と呼んでいた。かれは左官屋になるまでに所々をながれあるいて、いろいろのことをしていたらしい。それについては吉次郎も一々くわしく語らなかつたが、この話がかれが廿四五の頃で、浅草のある鰻屋にいた時の出来事である。最初は鰻裂きの職人として雇われたのであるが、ともかくも武家の出で、読み書きなども一通りは出来るのを主人に見込まれて、その家の養子うちになつた。そうして、養父と一緒に鰻の買出しに千住へも行き、日本橋の小田原町へも行

った。

ある夏の朝である。吉次郎はいつもの通りに、養父と一緒に日本橋へ買出しに行つて、幾策かのうなぎを買つて、河岸かしの輜子かろこに荷わして歸つた。暑い日のことであるから、汗をふいて先ず一休みして、養父の亭主がそのうなぎを生簀いけすへ移し入れようとする、そのなかに吃驚びっくりするほどの大うなぎが二匹まじつてゐるのを発見した。亭主は吉次郎をよんで訊いた。

「河岸できよう仕入れたときに、こんな荒い奴はなかつたように思うが、どうだろう。」

「そうですね。こんな馬鹿にあらぬ奴はいませんでした。」と、吉次郎も不思議そうに言つた。

「どうして蛭のたくり込んだか知らねえが、大層な目方でしょうね。」

「おれは永年この商売をしているが、こんなのを見たことがねえ。どこかの沼ぬしの主かも知れねえ。」

ふたりは暫くその鰻をめずらしそうに眺めていた。実際、それはどこかの沼か池の主ともいいそうな大鰻であつた。

「なにしろ、困つて置きます。」と、吉次郎は言つた。「近江屋か山口屋の旦那が来たと

きに持ち出せば、きつと喜ばれますぜ。」

「そうだ。あの旦那方のみえるまで囲っておけ。」

近江屋も山口屋も近所の町人で、いづれも常得意のうなぎ好きであった。殊にどちらも鰻のあらいのを好んで、大串ならば佃あたいを論ぜずに貪り食うという人達であるから、この人達のまえに持ち出せば、相手をよろこばせ、あわせてこつちも高い金が取れる。商売として非常に好都合であるので、沼の主でもなんでも構わない、大切に飼っておくに限るといふ商売気がこの親子の胸を支配して、二匹のうなぎは特別の保護を加えて養われていた。それから二、三日の後に、山口屋の主人がひとりの友達を連れて来た。かれの口癖で、門かどをくぐると直すぐに訊いた。

「どうだい。筋のいいのがあるかね。」

「めつぼう荒いのがございます。」と、亭主は日本橋でかの大うなぎを発見したことを報告した。

「それはありがたい。すぐに焼いて貰おう。」

ふたりの客は上機嫌で二階へ通った。待ち設けていたことであるから、亭主は生簀わじからまず一匹の大うなぎをつかみ出して、すぐにそれを裂こうとすると、多年仕馴れた業わざであ

るのに、どうしたあやまちか彼は鰻錐で左の手をしたたかに突き貫いた。

「これはいけない。おまえ代つて裂いてくれ。」

かれは血の滴る手をかかえて引つ込んだので、吉次郎は入れ代つて俎板にむかつて、いつもの通りに裂こうとすると、その鰻は蛇のようにかれの手へきりきりとからみ付いて、脈の通わなくなるほどに強く締めたので、左の片手はしびれるばかりに痛んで来た。吉次郎もおどろいて少しくその手をひこうとすると、うなぎは更にその尾をそらして、かれの脾腹を強く打つたので、これも息が止まるかと思うほどの痛みを感じた。重ねがさねの難儀に吉次郎も途方にくれたが、人を呼ぶのもさすがに恥かしいと思つたので、一生懸命に大うなぎをつかみながら、小声でかれに言いきかせた。

「いくらお前がじたばたしたところで、しよせん助かるわけのものではない。どうぞおとなしく素直に裂かれてくれ。その代りにおれは今日かぎりで、きつとこの商売をやめる。判つたか。」

それが鰻に通じたとみえて、かれはからみ付いた手を素直に巻きほぐして、俎板の上で安々と裂かれた。吉次郎はまず安心して、型のごとくに焼いて出すと、連れの客は死人を焼いたような匂いがするといつて箸を把らなかつた。山口屋の主人は半串ほど食うと、俄

に胸が悪くなつて嘔き出してしまった。

その夜なかの事である。うなぎの生簀のあたりで凄まじい物音がするので、家内の者はみな眼をさました。吉次郎はまず手燭をとぼして蚊帳のなかから飛び出してゆくと、そこらには別に変つた様子も見えなかつた。夜なかは生簀の蓋の上に重い石をのせて置くのであるが、その石も元のままになっているので、生簀に別条はないことと思ひながら、念のためにその蓋をあけて見ると、たくさんのうなぎは蛇のように頭をあげて、一度にかれを睨んだ。

「これもおれの気のせいだ。」

こう思ひながらよく視ると、ひとつ残つていた、かの大うなぎは不思議に姿を隠してしまつた。一度ならず、二度三度の不思議をみせられて、吉次郎はいよいよ怖ろしくなつた。かれは夏のみじか夜の明けるを待ちかねて、養家のうなぎ屋を無断で出奔した。

上総かづさに身寄りの者があるので、吉次郎はまずそこへたどり着いて、当分は忍んでいる事にした。しかし一旦その家の養子となつた以上、いつまでも無断で姿を隠しているのはよくない。万一養家の親たちから駈落ちの届けでも出されると、おまえの身の為になるまい、と周囲の者からも注意されたので、吉次郎はふた月ほど経つてから江戸の養家へたよりを

して、自分は当分帰らないということを断つてやると、養父からは是非一度帰つて来い、何かの相談はその上のことにすると云つて来たが、もとより帰る気のない吉次郎はそれに對して返事もしなかつた。

こうして一年ほど過ぎた後に、江戸から突然に飛脚が来て、養父はこのごろ重病で頼みすくなくなつたから、どうしても一度戻つて来いというのであつた。あるいは自分をおびき寄せる手だてではないかと一旦は疑つたが、まだ表向きは離縁になつてゐる身でもないので、仮にも親の大病というのを聞き流していることも出来まいと思つて、吉次郎はともかくも浅草へ歸つてみると、養父の重病は事実であつた。しかも養母は密夫をひき入れて、商売には碌々に身を入れず、重体の亭主を奥の三畳へなげ込んだままで、誰も看病する者もないという有様であつた。

余事はともあれ、重病の主人をほとんど投げやりにして置くのは何事であるかと、吉次郎もおどろいて養母を詰なると、かれの返事はこうであつた。

「おまえは遠方において何にも知らないから、そんなことを言うのだが、まあ、病人のそばに二、三日付いていて御覽、なにもかもみんな判るから。」

なにしろ病人をこんなところに置いてはいけなないと、吉次郎は他の奉公人に指図して、

養父の寢床を下座敷に移して、その日から自分が付切りで看護することになったが、病人は口をきくことが出来なかった。薬も粥も喉へは通らないで、かれは水を飲むばかりであった。彼はうなぎのように頬をふくらせて息をついているばかりか、時々寝床の上で泳ぐような形をみせた。医者もその病症はわからないと言った。しかし吉次郎にはひしひしと思ひ当たることがあるので、その枕もとへ寄付かない養母をきびしく責める気にもなれなくなつた。彼はあまりの浅ましさに涙を流した。

それからふた月ばかりで病人はとうとう死んだ。その葬式が済んだ後に、吉次郎はあらためて養家を立去ることになった。その時に彼は養母に注意した。

「おまえさんも再びこの商売をなさるな。」

「誰がこんなことするものかね。」と、養母は身ぶるいするように言った。

吉次郎が左官になつたのはその後のことである。

ここまで話して来て、鈴木有年は一息ついた。三人の前に据えてある火鉢の炭も大方は白い灰になつていた。

「なんでもその鰻というのは馬鹿に大きいものであつたそうです。」と、有年はさらに付

け加えた。

「叔父の手を三まきも巻いて、まだその尾のさきで脾腹を打ったというのですから、その大きさも長さも思いやられます。打たれた跡は打身うちみのようになって、今でも暑さ寒さには痛むということですよ。」

それから又いろいろの話が出て、馬琴と有年とがそこを出たのは、その夜ももう四つ（午後十時）に近い頃であつた。風はいつか吹きやんで、寒月が高く冴えていた。下町の家々の屋根は霜を置いたように白かつた。途中で有年にわかれて、馬琴はひとり歩いて歸つた。

「この話を齋藤彦麿に聞かしてやりたいな。」と、馬琴は思った。「彦麿はなんと言うだろう。」

齋藤彦麿はその当時、江戸で有名な国学者である。彼は鰻が大すきで、毎日ほとんどかきかずに食つていた。それはかれの著作、「神代余波」のうちにこういう一節があるのを見てもわかる。

——かば焼もむかしは鰻の口より尾の方へ竹串を通して丸焼きにしたること、今の鯰ほらのしろなどの魚田楽の如くにしたるよし聞き及べり。大江戸にては早くより天下無双の

美味となりしは、水土よろしきゆえに最上のうなぎ出来て、三大都会にすぐれたる調理
人群居すれば、一天四海に比類あるべからず、われ六、七歳のころより好み食いて、八
十歳までも無病なるはこの靈薬の効験にして、草根木皮のおよぶ所にあらず。

大正十三年六月作「週刊朝日」

青空文庫情報

底本：「鎧櫃の血」光文社文庫、光文社

1988（昭和63）年5月20日初版1刷発行

1988（昭和63）年5月30日2刷

入力：門田裕志、小林繁雄

校正：松永正敏

2006年6月2日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作にあたってのは、ボランティアの皆さんです。

魚妖

岡本綺堂

2020年 7月18日 初版

奥付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>